

オランダ・ライデン大学に於ける日本語作文授業

ライデン大学 大宅 憲夫

はじめに

現在におけるライデン大学の日本語教育は80年代初頭までのヨーロッパ一般に見られたような、主に文献解釈を中心とした伝統的な大学教育から、経済の低成長下でのオランダ文部省の教育政策、とりわけ財政縮小と教育改革による在学期間の短縮、従来の教育に加えて日本の経済発展とそれに伴う現象について現代の様々な分野に関する研究の必要性、またそれに加えて80年代のいわゆる日本ブームにより様々な動機をもった学生が従来に比べると大量に入学するようになったことによるなどの条件により、教育を短期間で効果的に行うという需要を満たすことが期待されている状況下で、日本語教育はそれに見合った読む、書く、話す、聞くといった能力を相互に均衡を保ちながら効果的に育成しようとする道を模索している。ここではこの四技能の中で今まで比較的研究、報告の少なかった作文授業についてライデン大学の3年次で行ってきた日本語作文授業に焦点を絞って述べる。

1 授業の目的

本学の学生は読むと言うことについては、1年次からの購読、解釈等の講義、演習で、また、話す、聞くということについては1年次から3年次までの必修会話実習と4年次での選択会話実習でそれぞれ学習するが、書くことについては1年次前期の書き取りと2年次通年の蘭文和訳、及び、3年次通年の作文授業で実習する機会があたえられている。(別紙機関報告のカリキュラムの項参照)。日本語を書くということは読むこと、話すことと密接な関係があり、切り離して考えることができない事、及び、とくに日本語表記の性質からその学習にかなりの時間を要するという問題があるが、テキストの解説に不可欠という制約からは漢字教育を積極的に進め、主体的意思疎通の道具としての日本語文章表現の可能性を最大限追及するということと四技能の相互フィードバック、活性化ということを含めての観点から日本語教育中級授業の一環として3年次前・後期(各期13週で1週1時間、計26時間)を通して必修科目として日本語作文を実習する。その目的は学生がそれまでに学習した文法、表記、態、漢字、ひらがな、カタカナ、おくりがな、てにをは等の知識を確認しつつ自分の見聞、観察、思考等を授業の中で日本語作文にし、この実習を通じて日本語を書くことに慣れ、日本語文章表現を意思疎通の道具として円滑に使いこなせるようになることである。そこで、以前には学生は教師が添削した作文を単に受動的に確認するだけに終わりがちだったものを、まず教師が学生の文章の中で誤りや改正の余地のある部分に傍線を引きそれを指摘し、学生に推敲させ再度提出させてそこで最終的な添削をするという2週間を単位とする二段階の作文指導方法をとることにより、学生が自分で問題の発見、訂正、推敲を行うことでより自覚的に日本語の様々な局面を確認、理解、学習することを促した。

2 学習者の背景

作文授業を始めるまでに学生は書くことに関して次に挙げる授業をすでに履修している。

1年次では1週間に1時間の書き取り授業(前期13時間のみ)で、初めの7週間でひらがなとかたかなを使っての書き取り、それ以後、漢字かな混じり文の書き取りを実習する。その方法は教師が1クラス40人前後の学生に20から40字程度の短文を初めは聞くことに集中し二度目は文節ごとに発話、三度目に確認、訂正する方法で約35分の間に12文程度を読み、それを学生が漢字かな混じり文に書き取るものであるが、その教材は現代日本語演習で用いられる自主開発教材テキストであり、書き取りの内容は数週間前に日本語演習で学習した文法、表現、漢字等を材料にして教科書の例文を教師が類似の文にしたものである。前期試験の対象となる漢字の数は300程度である。1年次における書くことについての実習は以上であるが、同じテキストを使って漢字、ひらがなを穴埋めする漢字テストを後期試験で必修としている。この試験範囲の漢字は自習、学生は一年を通じて合計約700の漢字を学習することになる。

2年次では蘭文和訳の実習が通年1週間に1時間行われ、前もって与えられた蘭文を予め和訳しておき授業の際黒板に学生が和文を板書し、教師が添削するものである。学生はこの2年間で日本語を書くことに慣れるがその内容は短文で、また与えられた文であり自分の見聞、意見をまとめて日本語の作文の形で述べることは個人的に日本人と書簡の交換経験のある数人を除いて皆無に近い。

3 授業の構造と実際

45分の授業は初めの説明及び質疑応答の部分と後の実習部分から構成される。初めの10分程度は前週の作文について、かなりの人数に共通している文法、語彙、表現などの誤りや注意すべき事項について教師が説明、補足し、そのあと作文実習(35分程度)を行う。前期の授業は2年次で学習した蘭文和訳授業の補強と重要基本文型の再確認を兼ねていて、蘭文和訳問題5問と作文で合計35分程度実習する。この授業構成で学生が実際に作文に費やす時間は凡そ15分から20分程度であり、1センチメートルの方眼紙縦書きで行間を1行空ける書式で400字を一応の目標とする。そのときの作文の題は一週間前に知らされるが、予め準備することが望ましい旨を確認する。後期は作文のみで、作文の題は実習当日教室で知らされる。辞書やワードタンクのような機械の持ち込みは何の助けもなくその場で学生の実力で作文するという基本方針からは望ましくないが、授業開始時期に漢字の力はともかくも語彙力、表現力の不足がかなりの学生に認められることから、漸次自己の実力による作文を目指すということと試験の際にはこれらの手助けの手段一切を認めないことを確認してこれらの教室内への持ち込みを許容する。ただ、辞書を引くという習慣は大切ではあるがあまりそれに頼るあまりそれに費やす時間が大きすぎると思考の流れや作文の量を増やすということを妨げることになりがちであることから後期には多少誤っても自力で作文をすすめることを指導する。後期の終りまでに35分程度の時間内に600字程度の作文ができることを目標にする。

4 作文の題材

前期は主に自分自身に関係した様々な事象、後期は様々な文章に親しみ出来るだけ様々な文体を通してそれらの話題について書かせる様にする。前期の例では、私のこと、一番大切なもの(こと)、秋、私の一日、私のホビー(趣味)、夢(眠っているときに見る夢、こうなったらいいと思う夢)、テレビと新聞について、日本語とオランダ語、子供の頃の思い出、私の好きな(嫌いな)動物など自己の周辺に題材を求めることにより比較的楽に作文を進めることが出来る

よう配慮するがプライバシーに触れられたくないという学生もいることを考慮してすべての作文はフィクションとして扱うということを確認しておく。

後期では様々な種類の文章に親しみその表現能力を広げることをめざして、自分の部屋を描写する、手紙(恋文)を書く、新聞記事を書く、よく知られているおとぎ話を書く、創作する、料理レシピを書く、性について、自分の異文化体験についてエッセーを書くということなどに題材を取った。

5 添削方法

前期には教師は学生答案の中で文法、表現、漢字、かな等の誤っている箇所、不明確な箇所、及び漢字を書くべきところがかなで書かれているような箇所に赤色の傍線を引きそこに正解を記入して添削する。その際必要に応じて注意を喚起するよう説明を加える。後期からは前に述べた二段階の添削方法を採用が、学生の自己点検の際の便宜を図るため文法、重要な表現などには二重の傍線、漢字(K.)、ひらがな(Hir.)、カタカナ(Kat.)、語意(Voc.)、意味不明(?)、意味は理解できるものの推敲の余地があるもの(~~)等の記号を用いた。これは学生がただ誤りを指摘されてもそれがいかなる種類のものかを判断できない場合が多いことと時間経済の理由に依る。

6 評価基準

前期においては5問の蘭文和訳と日本語作文を折衷的に行うため本来目的とする日本語作文だけに全力を集中することが出来ないが、採点配分は蘭文和訳50点、作文50点とする。蘭文和訳においては(作文においてもそうであるが)普通の日本人が読んでその意味が通じることが前提となる。基本的な文法構造、時制、態の理解がある程度整っていて多少の誤りがあってもなんとか意味が通じる合格点を5.8点とし、それ以下基本文法の誤り、語彙、漢字等を含めて弱いものに5点、回答の和文から正解がほとんど理解し難いものを4点とする。この際学生の回答は蘭文を文頭から文末までの前文翻訳を試みたことを前提に採点する。合格点以上に関しては漢字やかな等に多少の誤りはあるもののほぼ正解に近いものを8点とし、これ以下誤りの程度に応じて段階をつけるが一番重要な点はいかに文法が理解され、それが正確に表されているかということである。当然評価基準の軽重は文法、時制、態の理解に重点を置き、それを学生に日常よく認識させておかなければならない。

作文における評価基準はその量と質である。量に関しては前期では15分から20分で400字を一応の目安とする。量と質が相ともなって評価の基準となるが400字程度の作文で文法、時制、態、表現、語彙、漢字、かな等にほぼ問題のない者を30点とし、特に動詞、形容詞の活用、時制の誤りが見過ごせない程度に現れる場合は最高25点程度とする。漢字での誤りの場合いくつかの現れ方が考えられるが、漢字が正確に書き表されていない場合は簡単な注意ですまされるが、英語または蘭語訳を通してその文脈からみて誤った選択として現れる語彙に関しては学生の自己点検の結果を待ち、添削し、註を加える。後期の作文についても同様に評価するが、この際、個人の自己点検、誤りの反復等の程度についても十分注意を払う。

7 将来に向けての課題

学生の作文を限られた時間の中で如何に個別的にきめ細かく指導できるかはカリキュラム、

予算、学生数、教員の質と数、教材、学生の意欲等が相互に関連する中で決まるが、一層の教材の改良、データの整備、解析が必要であろう。特に、学生個人々種々の問題の所在、それに対する自己点検能力、反復する誤りに対する自覚、回復努力の有無などを、学生個人々のデータの蓄積により分析できればより細かい指導の基礎となるであろう。今、電子機器を用いての時間経済、効率、効果的な教育、事務処理、また、教師及び学生間の相互の情報の交換が日本語教育の中で今後の課題としてみられるが、作文指導の局面においても上に述べたような要素についてのデータベースの実現を見れば、教師の意志と実行力が伴うことを前提とするならばかなりの質的、量的な効果を期待できるであろう。

参考文献

- 石田敏子 1994「電子メールを利用した日本語通信教育2」第7回日本語教育連絡会議報告発表論文集
- 加納千恵子 1992「CAIを利用した授業研究の可能性－日本語読解支援システムの開発と授業分析－」日本語教育 第78号
- 小出詞子 1982「推敲」日本語教育辞典 大修館書店
- 小宮千鶴子 1991「推敲による作文指導の可能性－学習者の能力を生かした訂正－」日本語教育 第75号
- ウィレム ヤン ボート
1994「オランダにおける日本語教育の現状と課題」日本語教育事情報告編
世界の日本語教育 第一号 国際交流基金日本語国際センター